

【Ⅱ】 咲き続けて春を待つ

冬に咲く花はなぜか冬中咲き続けるものが多い。シクラメン、セントポーリア、クリスマスローズ、クリスマスカクタス、そしてランの仲間など、どれも花期が長い。このことはよく考えてみると、夏に咲く花とも共通している。夏も冬もシーズンを通しての温度が、比較的一定しているためであろうか。もう一つ冬の花の特徴は一日花が見あたらないところである。冬は夏と異なり一日の日照時間が非常に短い。花といえどもできるだけ長く日光にあたってから、生涯を終わるように設計されているのかも知れない。これは夏の花には木槿(ムゲ)や芙蓉(フヨ)など、一日花が多いのはまるで正反対である。

また冬に咲く花の特徴は、カタカナ名の多いことであろうか。このことはもとはといえば、輸入されたものであることを意味しており、日本の原産種はきわめて少ない。ヨーロッパでは冬になるとあらゆる植物は、大地の下の別世界で暮らすと考えられていたから、この季節、花を咲かせる植物には神が宿っていると信じられていた。もともとヨーロッパなどでは冬に咲く花は皆無に近いのである。だからヨーロッパ人のプラントハンターは冬に咲く花を求めて、世界へと探検に出かけたといっても過言ではないだろう。このため花屋さんの店先で冬に売られている花のほとんどのものは、温室で育てられた本来は春に咲く花なのである。豪華絢爛と華美を競う胡蝶蘭やシンピジウム、デンドロビウムなどのランの仲間も、本来は晩春から初夏にかけて、花を咲かせるものが多い。違った見方をすれば、人や動物のみならず、あらゆる植物にとっても、冬はそれほど過酷であり、残酷な季節と見るべきなのかも知れない。

しかしまた多くの植物は冬を越さないと、花を咲かせたり実を結ばないというのも事実である。たとえば促成栽培で真冬に食べるイチゴも、一度冬の寒さに当ててから加温して花を咲かせて結実させるし、サクランボやモモも同様である(08-02-00 春化現象参照)。植物はどれも季節のカレンダーをいわば D.N.A.の中に組込んでいるわけで、こうした大自然の法則を無視しては成り立たないのである。

※距=今まで種々の植物でこの言葉が登場してきたがあまり詳しく触れてこなかった。花の萼や花弁の一部分が突出して筒状になった部分のことを距と呼んでいる。もともとは蹴爪(ケヅメ)のことを意味し、雄鶏の足の後方にある突起の呼称であった。これがいつか形状が似ていたために植物にも用いられるようになったのだろう。スマレ、ツリフネソウ、イカリソウ、それにフウランなどのラン科植物によく見られる。



美しく咲いた胡蝶蘭。ランは美しい植物だが毎年咲かせるとなるとかなり難しい。

この項に記されている植物のリスト

【Ⅱ】 咲き続けて春を待つ

07-02-00-1

- | | |
|--------------------|------------|
| 1) シクラメン | 07-02-01-1 |
| 2) セントポーリア／アフリカスミレ | 07-02-02-1 |
| 3) クリスマスローズ | 07-02-03-1 |
| 4) クリスマスカクタスとサボテン | 07-02-04-1 |
| 5) ポインセチア | 07-02-05-1 |
| 6) ハボタン＝葉牡丹 | 07-02-06-1 |
| 7) クンシラン＝君子蘭 | 07-02-07-1 |
| 8) 蘭の仲間たち | 07-02-08-1 |

目次に戻る
